

「国民経済との関連よりみたる国債制度」 (六)

池 田 浩 太 郎

第六章 国家信用

すでに序論でのべておいたように国家信用は最近の国家発展でのみみられる一現象である。以前の諸侯や政府が資本を調達しなければならなかったときには、これを私信用の方法と条件のもとでなすほかはなかった。しかし国家が権力と富を増大させるとともに政府経済の目的もますますおおきなものとなり、そして中央政府はますますおおきな資本を調達せざるをえないとおもわれるようになった。しかもそれを私信用業務からうまれた債務では充足することが不可能なところから漸次国家信用があらわれたのである。

実際上は困難に迫られて諸侯あるいは政府の私信用からただ段階的にのみ国家信用に移行したように、信用理論もおおかれすくなかれただ私信用のもうひとつの種類であるにすぎないように国家信用を理解する見解に因は

S. 114

S. 113

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

れている。¹⁾ なんとすれば資本を調達した国家の状態を、ほぼ私的債務者の状態とおなじと考え、かくして国家の利害は、債務の熱心なる分割償還によってこれをできるだけ早く完済することを要求し、これを政府の最高義務となすと主張する。そして分割償還の不可能性という厳然たる事実をもってなげかわしい不運とみなすからである。²⁾

- 1) ネーベニウスは公信用に関する重要著作とみなさるべき前掲書「二二ページで次のようにいう。」「公信用はたしかに私信用とおなじ種類の信頼からなりたつてゐる」と。国家信用一般についてはさうに次のものを参照された。C. A. Freiherr von Malchus, Handbuch der Finanzwissenschaft und Finanzverwaltung, 2 Bde., Stuttgart u. Tübingen 1830. 第一卷「四一九ページ」シウ「財政学」四八二節以下。Johann Friedrich Eusebius Lotz, Handbuch der Staatswirtschaftslehre, 3 Bde., Erlangen 1821/22. 第三卷「四三三ページ」ヤハ「前掲書」第四卷「一四九ページ」シエスコフスキー「前掲書」第七章「Friedrich Carl Fulda, Der Staatscredit, Tübingen 1832, S. 10. ヴーリッツ年報「一八三〇年に復刻されてゐるツマハリツの前掲論文。

ゆゑに国家信用について有益なる概観をのべてゐる Charles Ganih, Essai politique sur le revenu public……, Paris 1806, II, S. 224 ff. および前掲「原理」一三三ページ以下。ゆゑに匿名の函著作 Ueber den Staatscredit, von einem russischen Staatsmann, Leipzig 1840. Influence of the Public Debt over the Prosperity of the Country, By M. B.—1834 参照。

- 2) たとえば「マルフスの前掲書」四二三ページを読みたい。「かかる利点がいかにおおきく、かつ多面的であらうとも、おおきな国家債務は一国の政治的生命に害をあたえ、またその富裕をむしばむガンの害とおなじである。国家債務の度はずれたおおききは早晩しかしつ、ねにまた不可避免的にその富裕をだめにするであらう」。たとえそう鋭く云つ

たのではないにしろ、同様な見解をおおくの著作家たちはくりかえしている。

かかる見解は性急なる判断にもとづくものである。国家の本質および国家経済と個別経済とのおおきな相違を考察することを全く忘却しているわけなのである。この相違を顧慮することと第三章で発見した信用概念一般の適用とによってわれわれは容易に国家信用のよりよい見解に到達できるのである。

われわれは信用というものが貸手よりも借手が資本をよりおおく利益をうむように使用するだろうという両関与者の確信から生ずる資本の自由意志的移転の原則にはかならないということを学び知った。これは国民経済にとっておおきな意味がある。すなわち、信用によって国民経済の内に存在し、変形過程にあるわれわれが資本と呼んでいる財貨をつねにただちに、その時に最も合目的な財貨に変形しようとし、またしうる人々の手に入れさせることができ、かつこれら人々の労働作用下におかしめるのである。

一、国家信用の概念

おなじように国家信用とはこれによって個別経済資本を自由意志によって総体経済に移転させる経済力と考えられる。総体経済においては個別経済以上に有利に資本を使用しうるといふ確信を、国家および個人の両部門がもっているからこそ、この移転はおこなわれるのである。それゆえ信用操作の利益はここでもまた相互的である。国民経済にとってはその効用はとくに次の点に存する。すなわち、総体経済が借受けた資本でつくった財貨が通例個別経済がおなじ資本でつくりえたであろう財貨よりも、より必要なもの、あるいはすくなくともより価値あるものであるという点に存するのである。かかる譲渡された資本は大部分あたらしく成立した可処分資本であり、ただ総体経済の目的のために生産されたものであることからこのことは生ずるのである。このことは前章

国民経済との関連よりみたる国債制度(六)

でのべた総体経済の本質から生じたものであり、しかもわれわれは後にもっとくわしく考察するであらう。

かくて国家信用と国民資本とはあたかも私信用と個別経済の資本との関連とおなじ関連の上にたっている。しかし両種の資本間に存するおおいなる相違は両種の信用の間にまさに非常におおきな相違をもたらすことになるであらう。

それぞれの信用業務のもとで生ずる他の人々の利用のための資本の自由意志的譲渡は貸手のつぎのような確信にもとづいている。すなわち、彼は貸した資本の所有権を決して失わず、それによって彼がその資本からつねに利益を引き出すという確信である。そのためにこそ彼はそれを資本としたのである。借手がもはや資本を必要としないか、他の必要物の欠乏からこの資本の利益をもちや財貨のうちに実現しえないために、借手がもしこの利用にたいしてもはや支払いたないか、あるいは支払おうとしないならば、資本の所有者はその資本をとりもどし、彼は他の方法、すなわち、その他の人への貸付、あるいは資本の自己使用によって利益の享受にあずかりうることになるのである。

私信用にとってはそれゆえ資本あるいはその価値の一、定期間後の払いもどしは事物の本性にもとづく条件なのである。この条件なくしては貸手はその信用に信頼をもたないであらう。なぜならばかかる返済はただ通常新財貨の価値より、すなわち、貸付けしかも資本として利用した財貨が移行した新財貨の価値の内からのみ生じうるし、また生じてよいものだからである。もしかかる新財貨がまず資本をその財貨の価値から払いもどすことなしに借手によって全部消費されてしまったならば、貸手の資本は本来なくなってしまうのであり、そして弁済してもらうためには借手の他の財産部分をあてにするはかなくなるのである。かくて貸手の状態は不確実なものと

なり、返済期間の延期される幅がおおきいほどそれだけ危険がますますである。

もし借手が借入資本でもってなんらあたらしい財貨をつくらないで、むしろこの資本をただ自己の一般財産のうちに投げ込み、これを享受財の形で消費してしまうならば、返済は彼の保有している他の財産部分、すなわち、この部分に代っていわば借入資本を消費してしまったのであるが、からなされねばならない（不動産抵当、動産抵当）。

もし借手がそれを非物質的再生産のために消費したならば、たとえば自己あるいは他人の能力養成のために消費するならば、おなじようなケースが出現するであろう。返済はこの内に非物質的資本が固定されている個人のその後の生活の間の給付によってなされねばならないのである。

しかし既述のようにおおくの資本は、危険なあるいは合目的でない企業のために全くだめになるか、あるいはすくなくともその価値が毀損されてしまうがゆえに、すべての財貨もまた徐々に自然力によって破壊されるがゆえに、さらにはまた人間の生活と労働力とはしばしば偶然かつはかりがたい破壊にさらされるゆえをもって、すべての私信用業務にあっては、貸手の安全のために資本返済のためのあるそう長くない期間を契約しなければならぬのである。なんととなれば個別経済はただかかる移ろいやすい物質的財貨、あるいは人間の生命に結びついた非物質的財貨のみを生産するからである。

これに反し総体経済は物質的財貨のうちではただ非常に長期の生命をもつ財貨のみを生産する。しかし非物質的財貨および非物質的資本が総体経済の主目的を形成しており、われわれはこれらに永久性を付与しなければならぬのである。なんととなればこれらのものはただ国家とともに無に帰しうるものだからである。かくて国民資

国民経済との関連よりみたる国債制衡 (六)

本の最大部分は非物質的財貨および非物質的資本の形態に固定されている。この形態から国民資本をふたたびとりだすこともできないし、ただその効用の永続的な年々の再生産によってのみその永続的存在が確認されるのである。おのずからあきらかなように国民資本の肉体的死滅あるいはその価値破壊は、もし国民資本が永続的に流動資本によって維持されているならば不可能なことである。

二、資本の非償還性

債権者が資本所有そのものを喪失することにはたいする安全のため、あるいはここからえられる利益の安全のためには総体経済に信用で貸した資本の償還は、債権者にたいし利子の形態で約定された年々の利益への参加という形で、その所有権とその享受の存在する限りは不必要である。ともかくも一定時期においての返済は必要としないし、また資本からの利益が存続している限り、そもそも不必要である。借手の反対給付はここでも私信用とおなじく借りた財貨の獲得された価値より、すなわち、借りた財貨が資本に変化したその資本の利益より生ずるのである。しかしかかる利益は一度に実現されるものではなく、むしろ小部分ずつ非常に長い期間にわたって配分されるのであるから、反対給付、償還は理の当然としておなじく長い期間にわたることになるのである。

かくて財貨を貸付けた個別経済の総体への、総体経済からの資本の償還は、もし事実を正確にみるならば本来全く不可能なのである。何となれば貸付けられた財貨やその価値はまさに永続的利用のために投下されたのであるからもう一度固定国民資本より取りだすことができないからである。ある他者——もっとも顕著な場合は納税者の全体——がある他の資本をもってそのかわりをさせ、それゆえ国家が個別経済の総体にたいして全くおなじ状態のままでいることによってのみ、個々の債権者への償還はおこりうるであらう。

かくて約定された一定期間後の償還というものはともかくも非合目的である。なぜならばもしこのあたらしい貸手が自由意志的に存在するのであるならば、償還はただ目的なき形式性をもつのみである。なぜならばこの場合新・旧貸手間の事務は非常に簡単にすまされたからである。課税による分割償還の場合のようにあたらしい貸手がふるい貸手に代って登場することを強いられるならば、その償還の影響は無条件的に欠点だらけのものとなるであろう。なんとすれば償還は資本の最も合目的なる使用を阻害し、しかも利益をうむ既存の投下からの資本の引きだしを必要とする場合がおおいからである。

借入資本の返済に関して国家信用と私信用とを区分するかかる相違というものは、国家信用が信用の特別の種類として独特の本質をもつものと認められるところの性格的特徴である。

信用の適切なる使用が国富におよぼす強力なる影響の最大部分はいうまでもなく国家信用によって調達された資本のかかる非償還性にもとづいている。ここにイギリスが権力と富との大規模な開花と同時にその国家債務の老大なる増大とによって注意深い観察者に投げかけた謎をとく鍵がある。

国家信用と国富とのかかる関連をまず次のふたつの章で詳細に論じよう〔実際には本書はあと一章しかない〕。しかしこれについてここで簡単にスケッチすることは必要であろう。

既述のように、もし国家がその信用によって調達した資本を一定時期になつて償還する必要や、あるいはそもそも返済する必要がなかったり、またその義務もないということがありえたとしても、これによってつぎのような見解を誤ってもってはならない。すなわち、それだからこそあたかも個々の貸手もまたそれが彼に有利に思えたときでもつねに、あるいは時によってはふたたびその資本を所有することが不可能であるかのような見解に誤

国民経済との関連よりみたる国債制度(六)

りみちびかれてはならないのである。むしろこの非償還性は最も内面的にかつ必然性をもって他のある現象と関連しているのである。すなわち、この現象は国家信用のもとでのみ可能であり、国家信用の大なる作用のもうひとつの主たる基礎を形成するのである。これは個々人が国家にたいしてもつ債権の不_レ断_一の市場性であり、国家がその信用維持のためにその債券の一部を永続的に自由流通において買_いもど_すことの国家にとっての必要性である。総体経済への投資の利益がおおきい場合には、つねにある程度の人数の資本所有者は国家に貸そうという性向をもっている。それゆえもし国家がまさに新資本を使用しない時には他人の国家にたいする債権を買_うことになるであろう。彼の資本をふたたび所有するために彼の債権を販売しようとしたおおくの他の人々もおなじくこれによってこの目的をいつでも達成することが可能となる。なぜならばその債券（この場合競争の利益はあきらかに購買者の側にある。購買者こそ求められている商品、すなわち、貨幣を提供するものだからである）の公開販売の場合に、その信用を相場の非常なる低落によって動揺にさらされることのないように、国家自身が購買者の協同競争者として現われねばならないからである。債券の適当なる買手がなくない場合に、その債券をその所有者が売ろうとしている量だけ国家はその自由なる流通において買_うからである。かくて、国家は自己の債務を返済せず、買_いもど_しによつて回収するのである。国家の行為なしですでに自由流通の内でおこなわれている買_いもど_しの完全化と規制であるにすぎない国家のかかる処置によつて、各人は各自の永続的利子付債権をその時点での資本価値と交換する可能性があたえられるのである。

国家信用の場合には資本の非償還性は欠点であり、あるいは不快であるということは全くまちがっている。むしろこれは国家信用の私信用にまさるその最大_一の利点_一であり、国家信用のはかりしれない作用の源泉なのである。

資本を貸付ける人は通常、これを自分で使用する意図、それを自己の労働の基礎にする意図を長い時間あるいは永久に放棄するのである。むしろ彼は他の人々が資本を引受け、その利益を直接に財貨のうちに実現し、そしてかかる利益の一部を享受するために貸手に資本を引渡すことを望むのである。この場合資本の貸手は企業の危険を完全に借手に帰せしめ、貸手がもし非常な危険を感じたときに貸手の資本をただちにとりもどすことを可能にする条件を充足することによってその資本を喪失することになり、最大の安全をつくりだすべくもとめている。彼がより利益のある投下のためにその資本をとりもどすことを欲するや否や、おなじ条件は彼をまた満足させるのである。このふたつの例外の事例を除外すると彼の資本をとりもどすことは彼の意図に全く相応していない。もし借手が通常彼に同時に所属する解約告知権を使用するならば、これは貸手にとっては実に都合のわるいものでありうるのである。

この点において兩種の信用はどういう情況にあるのであろうか。

あきらかにこれは非常にちがうのである。すなわち、国家信用は有利に決められ、私信用はおおくの点で不利に決定される。私信用の場合には返済と解約告知についての契約条件が予め決められておらねばならず、またこれによって後に出現した事態を自由に利用することが不可能になるということがこれにたいする根拠である。債権者および債務者ともこの条件に拘束されているのである。ある場合には資本を満期日に確実に確保しておくために債務者がくるしみなやむし、またある場合は債権者はとりもどした資本のあたらしい投下口について不安となる。おなじく確定解約期日は債務者がもし解約のための資金を入手済の場合にもこれを速刻返済することをさまたげる。また債権者がよりよい投資口を心がけている場合に自己の資本を速刻に入手することもさまた

S. 120

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

げるのである。

国家信用にあっては事情はすべて逆である。この場合には債権者はもし彼自身がこれを要請し、したがってすでにこの資本のための合目的的投下口をもっている場合にのみ自己の資本をとりもどすであろう。しかし債務者としての国家はもし国家がこれを合目的とかんがえ、しかもそれが可能なきにのみ返済するのである。これによって国家は巨額の資金を一時期にあつめる必要からまぬかれるであろう。そして債権者はこの金額にたいする他の使用口を発見するための困惑から免かれるのである。債権者はあらゆる瞬間において自己の資本を債務者たる国家に負担をかけずに取りもどしうる。おなじく国家はいつでも債権者から支払をおしつけられることなしに支払わないでいることもできる。国家はその目的達成に必要な資本をつねに遅滞なく、返済の亡霊によってかかる龐大な資金源の完全なる利用をさしひかえさせられることなしに調達しうるであろう。国家はただ利払のための必要額のみを調達しさえすればよい。そしてこれは借入資本が合目的に使用されている場合にはかんたんには利払不能におちいることはないであろう。そして買いもどすか、あるいは買いもどさないことが得策であるかをその都度の状態にしたがつてあきらかにしうるであろう。このようにして信用の利用のために必要となつた操作は予じめ恣意的に規定されたものではない。むしろそれはつねに直接その時々にあたえられた状況によって形成されるものなのである。信用適用の目的は完全に達成される。なぜならばすべての資本は最大の容易さをもつて投資口を見つけ、しかもより有利な投資口が提供されるや否やふたたびそこから引きだしうるからである。かくして資本はつねに考へうる最も利益のあがる適用をみつけた¹⁾。そしていかなる瞬間といえども資本を遊ばせたままにするよう強制しないのである。

1) 次の書物に同様の見解がみられる。「前掲」一ロシア政治家著、国家信用論。この書物は国家信用へのかなりふかい理解を表明しているのとくに注目に値するものである。大部分の著作家の場合には返済に関するかかる区別は全然考察されていない。なんとなれば既述のように、まさにかれらはわれわれと正反対の国家信用の概念把握より出発しているからである。次章でこれらさまざまな見解を個別的に言及するであろう。国家信用のもつ特殊なる本質というのは大部分の人々の前提とはなっていない。国家信用は私信用とおなじものとされているのである。そして国家信用の提示する全く異常な現象は債務者としての国家の特殊な本質から導びきだされるのである。

三、国家信用は私信用を補完する

したがって国家信用は私信用の作用を最も大規模に補完するものとなる。なんとなれば私信用のもとでは資本の全く自由な移転を阻害するような、またそれにもかかわらず私的貸手の保護のため、すなわち、私信用のもとで必要な信頼をつくりだすために不可欠となっている制約を国家信用は取り除くからである。

かくて国家信用はその上にたつ国債制度という形でいわば国民経済の要諦をなす。人間の現状のもとでわれわれが国民経済にあたえうる最高の発展形態をなすのである¹⁾。

1) 経験はかかる命題の真理を最も明瞭に保証する。純粹国家信用の制度がもつとも大規模に適用されているイギリス、フランス両国は疑いもなく経済的にも最高位にたつものである。それらの国の国内の興隆、それらの国の富や権力および文化における前進は、それらの国々のうちのそれぞれがこの制度を適用した時からじまる。すなわち、イギリスでは十八世紀のはじめ、フランスでは十九世紀の二十年代からはじまるのである。

第三章で信用一般について発見したのとおなじ三様の方向で国家信用は国民経済の資本に作用するがゆえに、国家信用が私信用をそれぞれの点で補完することは従来の説明より單純に結論づけられる。

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

1) 国家信用は私信用とおなじく全国民経済的資本を永続的に生産的適用をさせておくのに役立つ。なんとすれば国家信用はすべての利用しえざる個別経済の資本部分、とくにその充足手段への直接の変形や個別経済の固定資本への直接の変形が合目的でないとおもわれるすべての新可処分資本を総体経済へとむかわせるからである。そこでは国民の固定資本としてそれが固定され永続的利用の基礎となるのである。国家信用はそれが生産企業というものの特殊性のゆえに時々遊休している資本のために短期の過渡的投下を可能にすることを通してとくに作用する。この点において国家信用は私信用機関の作用を補完するのである。¹⁾

1) ネーベニウス、前掲書、六六二ページおよび六六五ページ参照。彼はここでは起債の影響と既存の国家債務が資本の最も合目的な使用におよぼす影響とを分離して考察した。これは事実の観照のために役立つであろう。しかし両作用はその本質においては合致するのである。パウムスタルク、前掲書、第四卷、Versuch, も参照。

2) 大工業企業にとって生産手段調達のために私信用が必要なのおなじく、国家信用もまた総体経済のおおきな目的のために必要な資本を非常に効果をあげるために共通の作用へと結合させるのに役立つ。とくにいろいろの目的のために、たとえば暴力的攻撃にたいする国家の保護のために要求される物的補助手段を、必要なる速さで集中させることはただ国家信用の適用によってのみ可能であろう。かかる場合においては成果は主として巨額の資金を急速に調達することに依存しているので、かかる並ぶものない成果の本質的部分は国家信用にあらえられねばならないであろう。¹⁾

S. 123

1) 「信用は一国民をしてその力を攻撃のため、あるいは外的攻撃にたいする抵抗のために有効に使用させ、かつ決定的瞬間においてある一点にむかわせることを可能にさせる」。ネーベニウス、前掲書、二五〇ページ、および同書、二八

三ページ。

3) 最後に国家信用は、とくに国民経済的資本の永続的かつ無制限なる成長に影響をおよぼす。この作用については信用一般を論じたさいにすでに言及しておいた。国家信用は、一般国民経済のうちに成立し、有利なる投資口をさがしている可処分資本を国民資本のうちに引き入れ、利益をもたらすよう固定するからして、国家信用はつねに新集積と資本形成のための余地をつくるのである。この点において国民資本は、ひとつの最高かつ常にさまたげのない投下場所を形成する。かくてこの投下場所は、とくに特別な事情のために個別経済のうちでその資本を生産的に投下することにかかわりあうことを好まない人たち、ないしはそれができない人たちにたいして、新資本を形成すべき、また既存資本を（その資本の消費をさしひかえたことによって）維持すべき刺激をあたえるのである。なんとなればかれらにはみずからこれら資本を管理すべき能力あるいは性向が欠けており、しかもこれを私的企業者に貸付ける労苦や心配、危険率をおそれるからである。かれらの多数は確実かつ不変なる利子取得に主たる重点をおいているので、その永続的投下はかれらにとってあきらかに最大の利益であり、したがって最も望ましいものである。¹⁾

1) これについてはガニール、原理、の確定公債の全箇所、二三五ページ以下、とくに二五六および二六七ページを参照。公債は生産物の消費にあたっての節約からなりたつ。そしていまだ注目されなかったことであるが、これがうみだす利子の点で節約がよい投資となることを保証することによって公債は節約を促進させるはたらきをする。この利子は、生産資本を保持することによって、およびこれを弁済すべき納税義務者の努力によってうみだされたものである。同様にネーベニウス、前掲書、六六五ページではつぎのよういう。「それぞれの金額をかなりみちかい期間で利子を

国民経済との関連よりみたる国債制度(六)

うむよう投下すべき機会というものは節約にひとつの強力なる動機をあたえる」と。ラウ、財政学、四七七節参照。

国家信用のなおひとつの特殊な作用は、これが本質的に非常に制限されているところの私信用以上に外国資本の利用をずっと大規模に可能にするということである。¹⁾これは事情次第では非常に重要でありえよう。しかしながらこれはときおり国家信用がうけているような強調には値しないのである。なぜならば既述したところによれば、国家信用の主たる功績は当国民経済内部において個別経済の資本と総体経済の資本との最善の関連をいつも打ちたてるところに存するからである。後の章でわれわれは信用による外国資本の調達より生ずる問題にたちかえるであらう。

1) ネーベニウス、前掲書、六六五ページ。ガニール、前掲書、一五五ページ以下参照。

われわれはいままでひとつの全体としての国民経済におよぼす国家信用の作用について観察してきた。ただこの方法によつてのみ国家信用のただしい評価が可能であると信ずるからである。国家信用に関するすべての一面的かつ不運なる判断の原因は、まさに大部分の人々が政府経済ないしは総体経済と国民経済とを対置させることに存する。国家信用をただ政府経済に属するものとして考察し、したがって国家信用が個別経済におよぼす影響をもっぱら否定的な、不幸にして不可避免的なものと考へ、決して積極的あるいは有利なものかもしれないとして承認しようとはしなかった点に存するものとおもわれるのである。

われわれの叙述によれば国民資本を媒介とする総体経済はたんに総国民経済の一部、すなわち、国民経済が特定目的を達成するために採用するある特定の形式をなすにすぎない。かくて信用制度の両者へおよぼす作用は、最も密接に関連した形で考察されなければならないという必要がある。この場合もっとも明白なことはいうま

S. 124

でもなく総体経済の諸目的の成就である。なぜならば総体経済はその活動に入るやいなや、諸目的達成が主要標準点であるひとつのおおきな個別経済というものをいわば再び形成するからである。

総体経済自体にとつては、既述した信用の三つの主要作用のうち、必要な資本の調達と急速なる集中の作用とがとくに考察されることになる。ほかになお可能であった課税の方法では、これはおおきな困難に遭遇し諸目的の達成は本質的に阻害されるのである。国家はその信用によっておおきな可処分在庫の所有者を自由意志的譲渡に向けさせることが可能であるから、かかる難点は完全に除去され、不可能なことが可能になるのである。イギリスがその信用を遠慮なく使用することなしにナポレオン戦争を遂行しえたか否かは当然疑ってもよいことであろう。¹⁾

- 1) かかる国家信用の有利な作用はいうまでもなく最もひろく認められている。誰もがこれを否定しないからであらう。ネーベニウス、前掲書、二五〇ページ以下、マルフス、前掲書、四二二ページ、ロッツ、前掲書、四三三ページ以下、参照。

老大なる臨時の財貨が入用になると信用を適用することによって総体経済の安穩なる継続、その不変なる存続をもっとも害すことなく達成するというもうひとつの大なる利益を総体経済は獲得する。総体経済の固定資本と流動資本との関連がこの場合最もわずかしかな変化しないからである。いわばもし総体経済が信用の助力をしりぞけるならば、大量の財貨の入用がおきると総体経済の流動資本あるいは可処分資本より、すなわち、課税の方法によって調達するよう総体経済はつとめねばならなくなるのである。すでにふれた課税方法のおおきな難点を別にしても、この方法は必然的にかかる規則的補給源泉の非常な弱化をうむことになるのである。しかも一国の租税

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

力の減少とともに総体経済の流動資本は固定資本にたいしてますます不均衡な状態におかれてしまうかもしれないであろう。

だが個別経済の全体にとつては国家信用制度の有利性は主として上述した三主要作用の他のふたつのものに存する。なんととなれば国家信用制度は総体経済の目的のために必要とする資本を、それが最少の不利益しか蒙らずにとりうるところから、あるいはその資本の投下の全然ないところからとりだすからして、国家信用制度はすべての資本にたいしてもっとも合目的な投下の可能性をつくりだし、その資本の増加への恒常的衝動をつくり出すのである。

しかしながら国家信用制度のかかる長所のすべては課税制度との比較によつてはじめて明瞭に解明されるのである。かかる比較を次章で試みてみよう。われわれの問題の解決は終局的にはひとえにこの比較にかかっているのである。

四、国家信用における信頼の基礎

国家信用にかんするいままでの考察においては、われわれはつねに国家信用の一国民の総資本への作用に注目し、その総資本内部においてはただ個別資本の全体と国民資本とを比較したにすぎないのである。個別資本総体のうちのある特定部分の国民資本への移転の合目的性についてはわれわれにはなんらの疑問も存在しないようにおもわれる。しかしながら資本を国家に移転する者は国民全体ではなく、その個々のものがなしうるにすぎないので、われわれはいまやこれをこの個人々の立場からも考察しなければならぬのである。国家に資本をゆずるべく個人々々を決定するのはまさに国家信用なのである。

国家信用は私信用とおなじく貸手にとって彼の資本の利益が失はれず、しかも彼の資本についてのその他の使用が一定範囲内にとどまっているだろうという貸手の確信にもとづいている。総体経済の性格およびとくに総体経済の必要とする額から生ずる事情、すなわち、国家信用がかなり多量の個別資本におなじようにおよんでいるというこの状態は、しかしながら貸手のかかる確信に関しても国家信用は私信用とはおおきなちがいをみせるといふ結果をうむのである。

かかるちがいは、個々人を納得させる利子取得の確実性などにかんする個々人の意見ではなく、むしろ資本所有者の総体がこの点について抱く意見に存するのである。もし全資本家層がこの確信をもっていないならば個人はかかる確信をもちえないであろう。なんとすれば個人にとっては利子取得の根拠である中央政府のありうべき態度について根拠ある意見を形成することは全く不可能であるからして、利子取得の確実性に関しては、個人はいつもひそかに多少とも与論に結びついている。しかし個々人の資本のその他の使用に関しては彼は資本家たちの国家信用に関する意見に完全に従属している。個々人がそもそもまた一体いくらで彼の永続的利子請求権を販売しようかということとは、かかる与論に依存しているからである。国家が借りた総資本はおなじ運命を分かちしてその資本の所有者たちは借手である国家の代表者としての中央政府にたいし全くおなじ状況にいるからである。かくしてかれらはいわばその内部ですべての個々の構成員の意見がひとつの総体確信にとけあっている集合体をつくるのである。またその総体確信がすべての個々人の確信をも形成する。かくて国家信用の基礎となっているものは本来利子取得と債権の国家への不断の販売可能性にかんするかかる確信の一般普及である。すぐこれから考察するようにこれは非常に重要である。なんとすればこれはかかる確信への動機が私信用の場合と異なる

国民経済との関連よりみたる国債制度(六)

っており、しかもそれゆえに中央政府というものはその信用を私信用とちがった他の手段で支えなければならぬということから生ずるのである。さしあたりわれわれはこの点においてもまた国家信用が国民経済的發展のかなり高度の段階を暗示するものであり、かつこれを助成するということをしめせばたりである。国家信用は個人の主観的恣意意見に代って一般的理性、与論、インテリクласの共通の確信を信用の内に位置させるからである。移行というものはツンフトの頑固なエゴイズムとメカニズムから工業家たちの自由競争への移行および工業家たちの知性との一層つよい結びつきへの移行とおなじようにおおいなるものである。

国家信用と私信用との間のもうひとつの相違は次の点からのものである。すなわち、国家信用の場合には利子支払の義務を引受ける人が、資本による利益の実現を意図して借入資本を直接に利用する人ではないという点に存する。もちろん事物の本性にしたがって、それぞれの反対給付はこの利益からえなければならぬ。借手の中央政府は貸手と総国家構成員との間の仲介者であるにすぎない。総体経済への参与者としての総国家構成員は借受けた資本の直接の利益享受者である。しかしかれらは納税義務者として、借受けた資本からの利益にたいする対価を利子の形で国家への債権者にあたえなければならぬ。かくて総国民は本来支払義務ある者として国家への債権者と対置されているのである。

五、給付能力

かくして私信用の基礎をなす借手への信賴は国家信用の基礎にある信賴とおなじではないということが生ずる。私信用においては信賴はおなじように平等に二点にひろがっている。すなわち、その債務を完済しようとする借手の誠実なる意志と、このための手段を調達する能力の二点である。国家信用の場合には能力はほとんど問

題にならず、意志の問題も非常にモディファイされた形でのみ問題になるにすぎないのである。

給付能力は私信用の主要なる基礎をなしている。なんとすれば意志が欠けているのは法的強制でもって代用できからである。もっとも誠実なる意志がある場合にも、そのために必要な財産の欠如あるいは喪失によってその債務を完済しえない状況がしたいすることが個々人にはままありえよう。なんとすれば個人にはあらゆる自制にもかかわらず、債務完済のために必要な手段を調達できないことがあるからである。

国家信用にあつては逆にすべき確乎たる意志が主たる基礎となるであろう。すなわち、この意志は給付能力の代用をするのである。この意志は必然的に給付能力を生み出すからである。債務の完済のための意志があるということは、国家信用の場合には私信用の場合のようにには意志が法的強制によつてもたらされえないだけに一層必要なのである。幸運にもかかる意志は必然性をもつて信用制度の本質より生ずる。かくて国家信用は私信用よりも格段と安全におもわれるのである。国家信用にあつては給付能力は借手の意志によつてつくりだされる。しかもこの借手の意志というものは信用制度の適用から分離しえざるものである。われわれはこれについてよりくわしく考察しなければならないであろう。

給付能力に關しては中央政府の給付能力と国民の総体の給付能力とを区分しなければならない。既述のように国民の総体は借入れた資本によつて利益を實現し、新財貨に変形させる本来の借手である。かくてかれらは本来的給付の義務者でありしたがつて本来的にはただかれらのなすべき能力についてのみ論じうるのである。かくてその時の政府権力の給付能力には非常にわずかしか依存してゐない。政府権力の場合には意志が全く能力にとつて代るのである。これは貸手にたいする借手のすべての反対給付はただ借入資本の利益の形で獲得された価値か

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

らおこなうことができ、しかも政府はこの利益をみずから金にかえることをしないということから生ずるのである。いうまでもなく経験があきらかにしめすように、国家への債権者たちのすべてはその時の政府権力の給付能力ではなく国民の総体的給付能力を信頼しているのであり、これにもとづいて国家への債権者たちは国家に信用をおくったわけである。¹⁾

1) このことはとくにフランスの国家信用のもとであらわれている。ここで周期的にあらわれた王朝交替は資本所有者の信頼にたいしなんらの影響をもあたえなかつたのである。各王侯は永続的利子支払という約束で借りた。しかし貸手は恐らくすでに数年の後に王侯がその約束を守りえないということを最もありうることとして期待せざるをえなかつたのである。

さて、いまや総体経済が理性と熟慮とを以て導びいている健全に発展しつつある国家においては、固定国民資本の形で固定された借入資本の利払のために、総体経済の流動資本として個別経済から総体経済に与えられねばならない財貨量は、そも、そも、みだされうるものであるということは全く疑う余地のないものである。¹⁾ なぜならば もっとも極端な場合でさえそのためには、個別経済にとっては直接的享受財の生産のためと決められていた財貨準備を個人にとってたいした負担にならない程度に減少させ、またこれによって総体経済に譲渡すべき可処分資本を強化させれば充分であつたからである。

1) この命題がまさに支配的理論と矛盾しているにもかかわらず、ここではこれについて充分たち入って論ずることができない。なんとすれば、支配的理論は国家の消費するすべてのものは無になってしまうのであるという偏見のある絶対的仮定から出発するから、この理論はあきらかにかかる無にされた資本が再生産可能であるということを認めえな

S. 130

いのである。かかる誤れる根本見解についてはすでに第二章で論評しておいた。しかも次章でこの理論家たちの種々なる見解にたちかえるので、なおさらここではあまりたち入ることができないのである。かくてたとい本章で対立している個々人の見解を個々の引用し、再述しないとしても読者はゆるしてくれるであろう。なぜならばこれを論ずるよりよい機会が後にあるとおもわれるからである。国家信用は従来とにかくその本質と概念とについてあまり充分にはたち入って考察されていないのである。

多少とも正常なる経済生活をしており、それゆえに経済的に進歩している諸国民のみをここでは論じうるといふことは言及するを要しないであろう。なぜならばすべての国民経済の本質は発展と進歩であるからである。かかる国民のみがもちろんその総体経済とその国民資本とを拡大し、かくて国家信用を使用するという契機をもちうるのである。停滞あるいは沈滞した国民ないしは没落しつつある国民はそもそもその国民資本を増大させえない運命にある。そしてもしかかかる国民が外的事情で国民資本を増大すべく強制されるならば、その国民は財貨享受を減少させるか、あるいはあたらしく進歩することを決心しなければならないであろう。全く効なき巨額の浪費というものは健全なる国家においては信用の低下のためについては資本家が締めだされてしまうだろうからして、圧倒的高さまでには増大しえないのである。

かくて国民の給付能力には本来全然異議をさしはさみえないのである。しかし国家への債権者にたいしかれらに帰属すべき財貨を直接交付するのは個々の国民ではなく政府であるから、国家信用はよりおおく政府の給付能力に依存しているようにみえ、それゆえ大部分の人がこれに最大の重点をおいている。しかしこれは不当であろう。なぜならば給付すべき能力はこれに必要な財貨の所有あるいはあらたなる生産にもとづくからである。総

國民經濟との関連よりみたる国債制度 (六)

体經濟の代理者としての政府はしかしなんらの物的財貨をも生産すべきでないであろう。この場合政府は物質的財貨をただ納税義務者から国家への債権者にはこばねばならぬのである。課税の合目的管理という政府の實際的手腕、およびとくに國民の信頼によって支えられており、その信頼は中央政府をして政府自体の存続のために必要な犠牲を危険なしに國民に要求することを可能にさせるその道德力、これら特性は中央政府をしてその債務を精確に完済することを可能ならしめるものである。

しかしながら政府の給付能力、*Leistungsfähigkeit* をぐくりあげているかかる要素をいまや「給付すべき資力」*Vermögen zu Leisten* の概念の下におくことはできない。かかる要素はむしろ單純にすべての信用にたいするもうひとつの基礎に属するのである。この基礎は約定された債務の完済のための確乎たる意志の形で存在する。その債務を完済すべき確乎たる意志をもつ政府は、必要なる洞察を政府がもつことを前提せねばならないので、國民から必要なる手段を政府にまかせられるような手續をひかえるようになる。かくて政府はただ意志をもつだけで給付能力の所有もでるきわけである。¹⁾

- 1) これについてはネーベニウス著、前掲書、第五章、二、三節、二一五ページ以下およびラウ、財政学、四八三節および四八四節参照。

六、給付しようとする確乎たる意志

このことは国家信用のもうひとつの基礎のよりくわしい考察に到達させることになる。これをわれわれは前述のところすでに最も主要な基礎と表現しておいたのである。そしてこの基礎はその債務を貸手にきちんと完済するという借手の確乎たる意志のうちに存する。

国民、個々人の側からはこの意志はそう重要な問題とならないであろう。かれらはその貢納を租税納付の方法でおこない、かくてその納付は他の諸税とおなじく、かれらの一般国民義務から生ずるものであるし、しかもかかるものとして強制されうるからである。しかしながら全国民の間でのこの意志の存在はつぎの点でひとつの重要な間接的影響をおよぼすであろう。すなわち、貢納をより喜こんでなそうとするようになり、したがってよりおおきい収益が生ずる点、しかも政府権力の形成におよぼす個々人の影響と政府の行動様式におよぼす与論の影響のために、この意志は政府にあってはある特定の形態をさえとるであろう点に存するのである。この点においてたいいていの場合に国家への債権者自身が国民のあるおおきな、あるいはすくなくとも非常に影響をおおい部分となすということはとくに重要である。

最後に債務を完済しようとする中央政府の確乎たる意志は国家信用の場合には本質的重要性をもつ。この意志は資本所有者に利子取得の確実性への確信をあたえる。この確信は国家信用の基礎になっているものである。いうまでもなくいまやかかる確乎たる意志は開花している国民の政府にあってはある程度自明のことであり、それゆえ通常存在するものでもある。法と規則とを保持しかつまもり個々人をしてその債務を完済するように督促することは政府の任務であるからして、政府の本来の關係において個々人に対立するような行動をとることは政府の意図するところではありえないのである。にもかかわらず貸手の信頼はかかる一般的原则に非常に稀にしかもとづきえないし、またもとづこうとしない。なぜならばこの原則の例外はあまりにもかんたんに可能であり、しかも非常にしばしばおこったからである。しかも個々人の場合に意志の欠如を代用する手段、すなわち、法的強制は最高の国家権力の場合には適用できないものでさえあるからである。

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

いまや国家信用制度は幸いにししてそれ自身のうちにかかる悪い状態から抜けだしうる手段をもっている。しかも私的債務者の意志欠如にたいする法的強制によるよりも、より完全に抜けだしうるのである。かかる手段こそは国家したがってまた中央政府自身、関心事なのである。第三章で信用の一般的考察をなしたときに、信用の重要性の上昇にともなつて各自の債務のきちつとした完済によつて各自の信用を保持すべきことが、各自のもつとも努力すべきものであるということを暗示しておいた。政府あるいはまたそもそも国民の総体もそれ自身の関心によつてその信用の無制限の利用を確保すべき必要なるすべての事柄をなすことに駆りたてられることになるであらう。かかる推進力はひとつには国家信用の有利性が非常に大となればなるほど、またふたつには私信用で債務規則が保証するような確実性が国家への債権者に欠けていればいるほど、それだけつよくなるであらう。¹⁾

- 1) この点はまずツァハリエがスケッチしたものである。ペーリッツ年報、一八三〇年の前掲論文、二二一ページで彼はつぎのようにいつている。「なぜ今日のヨーロッパ諸政府が老大かつ確乎たる基礎をもつ信用をもっているかという主要なる根拠は、政府のすべてにたいし、したがつてどんな状態におかれたときでも、その債務者が支払うべき確乎たる意志をわれわれが信頼しうるといふ根拠である。なぜならはすべての政府は政府が将来より、おおく、借りねばならぬ、ことを予知しているからである」。他の大部分の著作家たちはこの理由にあまり注意しなかつた。

かくして一般的にいつてその真の任務をある程度認識しており、しかもこれを解決しようとする意図をもつそれぞれの政府権力は、国家信用を維持し強化することにその最大の努力をかたむけるようになる。たとい政府のプランがどんなものであらうとも、またそのプランが総体の真の利害に應じていないものであつたとしても、政府はつねに信用プランの遂行を必要とするであらう。プランが総体の真の利益に應じていない場合には一層そう

である。かくして政府は一方では国家への債権者にたいするその債務を最大の精確さでもって完済し、他方精確なる利払のための手段を将来にわたっても確保するために、国民経済の発展を政府の全活動によって促進するという政府の意図をそのすべてのあゆみにおいて明白に白日のもとにさらすのである。国家信用への顧慮というのは政府にとって国内予算の整序とその公開性へのもっとも本質的運動根拠となるであろう。政府はついには国家の租税制度を全力をつくして完全化しようとするであろう。これは利払の規則的継続のためのもっとも本質的保証を提供するものだからである。

政府のかかる活動は政府が信用の助けを借りてしまえばそれだけ明白となるにちがいないであろう。かくて国家信用はひとたび成立するやそのもっとも本質的支柱をそれ自身のうちにもつ。そのために国家信用はそれがすでに大であればあるだけ（私信用の場合とは逆に）それだけおおきく成長するという独特の現象をしめしている。なんとすれば政府と国民ならびに債権者の総体というすべての関与者は国家信用の維持と向上におなじつよさの関心をもっているからである。¹⁾

1) かくして国家信用は、開花している国民の全生活と何千もの糸で結びついている非常に巧妙なる制度である。国家信用は文化の所産として一国民に普及した高い知性と道徳的意志力とのもっとも美しい果実として考察されなければならない。

一国が普通すでに自分で使用した信用がおおきければおおきいほど、おなじことを債務がおおければおおいほどといえるが、それだけ大なる信用をもつという一見人をおどろかす現象がここからあきらかとなる。経験よりくみとられた認識、すなわち、国家というものは大なる信用をもつためには債務を負わねばならない、それゆ

国民経済との関連よりみたる国債制度(六)

えにこそ債務国家は最強力たりうるという認識はおなじ事情にもとづいているのである。¹⁾

1) ツアハリエ、前掲書、二二二ページ。

七、憲法の影響

国家への債権者にたいしてその債務を精確に完済し、このための政府の確乎たる意志を政府のそれぞれの行為によって明白にすることを、それぞれの政府の固有の利害があきらかに命じた。とはいえ、しかしながらこれは非常にさまざまな程度、でおこりうるし、またここでは一国の憲法の影響が力をもっているのである。¹⁾

1) ネーベニウス、前掲書、二一九ページおよび二五七ページ。バウムスタルク、前掲書、四九ページ以下。ラウ、財政学、四八三節。とくにツアハリエ、前掲書、三二八ページ以下を参照。

国家への債権者の要請にたいする恣意的破棄というものはほとんど可能性がないであろう。国家信用が論題となる場合にはただちに、ただかなり高度に発展した国家のみが考察されうるものであり、かかる国家にあっては国民経済と政治的国家形態とはすでに高い形成の段階に到達していることもここではまた忘れてはならないのである。かかる国家のみがその国家の信用を使用することができるしまた使用すべきである。かかる国家のみがそもそも本来の国家信用をもちうるのである。

この種の国家においてひとたび国家信用制度が導入されるや、すべての国民の総体経済としての国家のより深い本質への洞察、とくに国家信用の提示する利益への洞察は非常に完全なものとなる。そして統治者および総国民の意向が滲透し、国家への債権者の要請を破棄することは自己否定の行為とみられるにいたるのである。しかもただ非常にいちじるしい瞞着と疑惑のみがこの自己否定的行為へとおもむかせうるかもしれないのである。そ

れを敢えてなした政府はすくなくとも長期にわたっては面目を失うことになるであらう。大体の場合たんに与論の道徳的圧力のみでなくまさに既成の権力もまた政府にこれをなさしめないのである。なんとすれば国家信用の純粹なる維持が高度の重要性をもつという確信は長い間ヨーロッパ諸大国にかたく根をおろしているので、国家への債権者の権利はいわば国際法の保護下におかれるようになったのである。国家の変革によって樹立された新政府の側からする、あるいは以前独立していた国の篡奪者の側からする公的債務の承認は新政府がヨーロッパ国家連帯へ入るための承認にたいする必要条件なのである。

国家を破滅の淵にまで追いこんだかもしれないあるおおきな全般的不幸のみが、個人にたいして負う国家の既存債務の破棄というものをなしうると考えうる道かもしれない。かかる災厄によって私有財産をよりおおく危険にさらし、かつ確乎たるものがなくなるようにするかもしれないからして、危険性というものは国家信用への弁護を弱化させないこともありうるのである。

したがってたとい貸付資本の完全な損傷の危険性、すなわち、私信用をおびやかし、私信用をみずから従属させている危険性は国家信用の場合にはみられないとしても、外からの圧迫あるいは内からの不穩によって利払の規則性が中断したり、あるいは疑問となることがありうるであらう。そしてこれによって規則的利子取得を勘定している国債証書の所有者にたいし手痛い損失というものをしゅつたいさせうるであらう。これは国家信用が傷つきうるところの点であり、もし政府が信用のはかりしれない手段を傷つけたりせばめたりしたくないならば、それぞれの政府が最大の注意を払わねばならぬ点なのである。

国家の信用はかくて国家の力が外敵による滅亡あるいはおおきな物質的損害から国家を守ればそれだけ、また

國民經濟との関連よりみたる国債制度(六)

その内、政治状態が国家の平穩なる継続發展を国内的不穩によつて中断されないように引受ける権限をあたえられればそれだけおおきなものとなるのである。

第一点はヨーロッパ諸国にとつて、とくにこのうちの弱小国にとつてさえ、均衡体系がヨーロッパ諸国のそれぞれの国のいづれの維持をも他の国の自己保存義務となさしめるがゆえに、しかもすべての国の存続と偉大とが一般ヨーロッパ条約で保証されているからして重要ではない¹⁾。

1) ネーベニウスは前掲書、二八〇ページ以下で権力關係と国家の信用との間の相互作用を詳細に論じている。

かくてはつきり認識することができ、しかもかかるものとして貸手の信頼に影響をおよぼす国家信用の外的支柱としては、国家憲法のみがのこる。国家信用の場合には国家憲法は私信用における法的強制と似た役割をはたす。よい信用法規の存在が私的貸手をして、彼の債務者はいつもその債務の完済への意志をもつべくなしうるといふ確信をあたえるように、よい憲法は国家への債務者にたいし政府権力がそれを構成している人間の特殊な意志とは独立に、既存の債務の規則どおりの遂行を回避しえないといふ確信をあたえるのである。かくて信用法規がより厳格となるにつれ、私信用は一層大となる。憲法がますますきびしく、ますます決定的に中央政府の嚴守すべき活動を規制し、現実の政府権力がここからそれないといふ保証を政府によりおおきくあたえるならば、それだけ国家信用はおおきいものとなるであらう。

經濟的利益をもたらしめるものであることをしめし、かつ國民の富を助成するよい憲法のもつ諸作用のうち信用におよぼすかかる影響はもっともすぐれたもののひとつである。憲法があたえられた状態により自然的に適合すればするほど、またその憲法によつてうまれた政治形態と権力とが国家のうちに事實上存在する經濟力のための表

現であるにすぎなければすぎないほど、また憲法が純粹かつただしい国家概念によって完全に貫徹された者の手に立法権力および執行権力をあたえればあたえるほど、この点において憲法というものはそれだけよいものとなるであろう。

すべての国民を総体経済に参加できるようにするかなり高い文化のもとでのみ国家信用制度は相当広汎なる適用をみる。したがっていうまでもなくすべての人々が政府権力を形成するために協同することをゆるすような憲法は、国家信用にとっては最もよい条件をなすであろう。納税義務者の租税協賛権がこの場合非常に重要な役割を果たすということは、なんらの言及をも要しない。しかしもし国会制度にもとづく政府のみがおおきな信用をもちうるだろうと考えるならばこれはゆきすぎであろう。経済的国家イデーをその政府があきらかにしその政府が気むづかしい独裁的恣意の玩弄物でないときには絶対国家もおおきな信用を享受しうるのである。

1) ネーベニウス、前掲書、一五七ページ、ガニール、前掲 *Essai politique*……、第二巻、一三四ページ、ツアハリエ、前掲書、三二八ページ以下、フルダ、前掲書、十一ページ、参照。

国家信用、あるいはすくなくとも国家信用のその都度の額は一国の憲法によって本質的に条件づけられているので、国家信用はそれはそれでそのたんなる存在によってふたたび、現在の憲法と現に成立している政府権力との安穩なる存続を確乎たらしめるのに役立つのである。あるいはすくなくとも変革をその直接目的に限定することにより、また過渡時代をできるだけにやくすることによって必然的にあらわれる変革を、一般福祉にとつても弊害をすくなくするために役立つのである。すべての国家への債権者たちはその要求権を失うというおなじ危険性によって共通利害に結ばれている、しかもかれらは自然、一般的には社会におけるもっとも影響力ある

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

階級を形成しているので、かれらの発言は与論の方向にとつては決定的なものである。その発言は政府というものが久しきにわたつては回避したままではすまされえず、そしてこの発言にたいしては時おりおこる党派の企図は必然的に破砕されるにちがいない。国家への債権者は安穩や秩序のもっとも確乎たる支柱であり公的状态のそれぞれの動搖を決定的にきらうものである。なぜならば国家信用は適温の下では強力に成長するが一晩の霜でだめになってしまうかもしれない熱帯植物にたとえられるからである。¹⁾

- 1) とくにツアハリエ、前掲書、二二四ページの次の句を参照。「もしその慎重かつ着実さによつて国家の所管事項が管理されるべきであるならば、いかなる(大)国家も債務なしではすまされない、と主張してもよいであろう」。ラウ、財政学、四八〇節も参照。反対にロツツは(前掲書、第三卷、四四七ページで)起債のうちに「国家変革にたいする、または現在憲法の変革にたいするもつとも有力なテコのひとつ」をあきらかにみとめようとしている。

にもかかわらずもし政府がその権力をたよりにし、しかも与論を無視して憲法をきずつけこわすことによつて国家への債権者の利害を直接にか、あるいは(国民の経済状態を悪化させることによつて)間接的にきずつけたり危険にらしたりする方策というものを提案しようとするならば、政府はこの方法によつてはすぐにゆきづまり、あるいは逆コースをとることを強制されるようになるであらう。なんとなればまさにかかる危機における異常の状态と緊張とのゆえに、新公債の入用を欠かしえないし、しかもかくてその信頼を完全に失つた政府にたいして死刑の判決をすることが資本所有者に委ねられているからである。

われわれはさまざまな点をひとつの、考察に収斂してみよう。すなわち、

- 1) それぞれの政府権力は平穩かつ心配なく存続する時にもまた、その信用を保持する必要性のために自己の

利害から国民の政治的権利の尊敬、権力的処置への抑制、一般的富裕の育成と上昇、およびその公開の必然性のためになされる国家家計の整序と誠実性へと駆りたてられるのである。

2) 国内的政治権力あるいは外敵による大変革の時ににおいてもまた、物質的権力にもとづいている政治権力のそれぞれは、その信用の利用をさまざまに維持する必要性からして、その権力の使用抑制、とくに財産およびすべての経済的状态と経済的關係の尊敬と保護へと強制されるであろう。

3) 国民中の最も影響力ある階級はこれらの利子取得の安全性を顧慮することによって、平穩時にはその安全性をそれぞれ阻害するものに反対の作用をなすべく動機づけられている。また変革時には最も早く秩序回復をなすべく努力するよう動機づけられている。しかしいつでも政府の処置と国家家計における整序に、そして終局的にはその政治的権利の維持と遂行にはっきりした目を向けるべく動機づけられているのである。

かくて何度となく主張してきたように国家信用の適用の拡大、あるいはおなじことではあるが巨額な国家債務の存在は近代の国家生活における本質的要素を形成していることを認めないわけにはいかない。また近代の諸国民の政治的發展もまた富の増進とおなじように国家信用制度と非常に内面的にはなれがたく結びついていることを認めざるをえない。かくして近代諸国民の全存在はかかる巧妙なる制度と分解しがたくおりなされていることも認めざるをえないであろう。

国家信用は上述した方法で政治状態を支持するからして、あらためて間接的に国家信用自身の基礎をも強めることになるということを見落してはならない。かくして、ここでは原因と結果とがもっとも密接に関連しているのである。かくて国家信用はひとたび成立し、ただしく組織されたならばたんに成長しうるのみならず必然的に

国民経済との関連よりみたる国債制度 (六)

成長しなければならぬ。それゆえいふまでもなく国家信用は富の発展のためのおどろくべき力をもっている。そして国家信用を明確に把握することなしに国家信用のこの力におどろく著者たちはその反対者が考えているほどにはひどくはまどわされなかったのである。

われわれにとってはかかる驚異的作用の解明は既述したところから非常に簡単である。すなわち、国家信用の適用の拡大によって、国民の総体経済としての国家の真の本質がもっとも明瞭にあらわれ、政府はますます事物の本性からしてそうあるべきものに、すなわち、この総体経済の中心機関としてあらわれるにいたったのである。政府が独立の経済をいとなんでいるというふるい時代の状態にもとづいて見解は、政府が国家信用の拡大するたびにますます資本所有者に従属するという拒否しがたい事実の前に必然的に崩壊する。イギリス政府のイングランド銀行にたいする関係はこれについてのもっとも輝かしい例証をなすであらう。

しかし政府経済の一般国民経済にたいする関係についてのたゞしく明瞭なる洞察はひとつのおおきな経済的征服とみなされる。すなわち、ここから生ずる国民経済の進歩がもとづいているかかる関係の漸次的たてなおしはとくにすぐれたものである。

人間の経済活動は肉体的労苦よりもずっと知性的なものである。人間は精神力と精神的特性とを形成し使用するからして、人間はその入用の充足のためにもっとも根気よい動物の単純さをもってつづけられる筋肉の労苦によるよりもずっとおおく活動するのである。人間は信用のうちにひとつのただその精神的および道德的特性にもとづいた力のみをみとめ、かつ利用することを学んだがゆえに、人間は肉体的力の支出の最大の犠牲によってよりも、たとえば労働時間の倍増によって可能であったかもしれないものより大なるものを達成した。しかしして信

用体系の頂点に坐すものが国家信用なのである。それゆえもし国家信用の作用がすべての他の経済的努力を凌駕しているとしても敢えておどろくにはあたらないであろう。国家信用は近代の国家発展のもっとも祝福おき機構である。国家信用は強力なる国民経済的進歩とこれをもつてするヨーロッパ諸国民群の高い文化のためのもっとも大規模なるテコなのである。すなわち、世界をその地軸より持ちあげるアルキメデスの支点^いなのである。

- 1) アルキメデス Archimedes, ca. 287-212 B.C. は古代ギリシアの最高の数学者、物理学者。黄金の王冠の真偽をたしかめるために考へ出された浮力に関するいわゆる「アルキメデスの原理」は有名である。ここではテコの原理に関連して彼がのべたという「もし適当な支点があたえられるならば地球をも動かしてみせよう」という意味の句を想起してよからう。

〔本邦訳は昭和四十八年度文部省科学研究費補助金一般研究Dによる研究成果の一部である。〕